
.hack//Cross **黄昏の使者と不屈のエース**

夕暮れ竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack / Cross 黄昏の使者と不屈のエース

【Nコード】

N5148Q

【作者名】

夕暮れ竜

【あらすじ】

大人気オンラインゲーム『The world』を救った英雄、ハセヲ。

突如来たAuraからメール。疑問を感じつつもある場所に行くと、驚愕の事実を突き付けられることとなる。

白き鎧装士が再び奔走するhack / GU のもう一つの物語・・・

第1話 狙ってやった（前書き）

内容を大幅に編集しました。

感じはだいぶ変わりましたが大筋に変化はありません。
ご迷惑をおかけしますが、なにとぞご容赦ください。

第1話 狙ってやった

さて、まず何から説明すればいいだろうか。
今もまだ混乱気味だが、とりあえず最初から順番に話していこうと思う。

三崎亮は学校から帰ってきてメールを確認した。
既に亮は受験生であったため、The world は一時休止状態なのだが、

メールのやりとりは現在でももちろん継続している。
最近はアトリからのメール（たまに怖えメールもある）が隙なく送られてきて、もはやチャット感覚になってしまい、
ゲームを封印した意味ねえじゃねえか！ とか思ったりしているが
この際はどうでもいい。

重要なポイントはメールだ。
亮の所に有り得ない、ということはないが驚嘆に値する人物からメールが来たのである。

——A u r a

The Worldで起こった大事件にかかわった時に力を借りた
ご隠居女神様だ。

メールはお約束と言わんばかりに文字化けしていたが、エリアの名前はかるうじて読み取ることができた。

△隠されし 禁断の 聖域、グリーマレーヴ大聖堂。

亮にとって始まりの場所であり、終わりを意味する場所でもある。

亮自身、心の中で終止符を打ったつもりだったので正直またここに来ることになるとは思わなかった。

人生何が起こるかかわからないとはよく言ったものである。

そして、その場所で新たな始まりを宣告された。

「また……悲劇が始まろうとしています」

「悲劇……？」

意味が分からないといった様子のハセヲ。

今や事件の元凶となったA I D Aは駆逐され、ネットワーククライシスも回避された。

悪いうわさがあるものならクーンやパイあたりから連絡があるはずだ。

心当たりがまったくないだけに困惑するハセヲを差し置いて、A u r aは衝撃の一言を放つ。

「ひとつだけ……たったひとつだけのA I D Aが、他の世界に転移してしまったのです」

——笑い話にもならない。

「……それは冗談じゃないのか？」

「冗談のために私が出てくるようではこの世界も終わりでしょうに

……」

そりゃそうだ。

しかしどうにも理解できない点があった。

”有り得ないことはない”。

AIDAが生き残る可能性も0ではなかったかもしれない。

なんせネットワークは広大だ。生きていても不思議ではない、と思う。

これはまだわかる。だが他の世界とはどういうことだ？

他のネットゲと言う意味ならハセヲは手も足も出ない。

The worldのルールに沿う碑文が他のネットゲで通用するとも限らないし、

そもそもそこには碑文自体が存在しない。

ワクチンのない中、ウィルスの海に飛び込むのと同義だ。

「オレに他のネットゲで戦え、ということか？ 碑文もないのに抵抗できるのかよ」

良くて秒殺、悪くて瞬殺だろう。

「他のネットゲームという意味ではありません。」 異”世界にAIDAが拡散してしまったのです」

……頭が痛くなってきた。

「ちょっと待ってくれ！ それはそもそもネットですらねえだろ！ 意味が分からない！」

AIDAは実体化なんて器用な真似はできなかったはずだ」

異世界に同じようにネットがあるというのか？

電気があるかどうかさえ怪しいというのに。

「……異世界と聞いてまず何を思い浮かべますか？」
「は？」

唐突な質問にハセヲは内心首をかしげつつも答えてみる。

「そりゃ、ファンタジーな……魔法とかがポンポン出てくるような世界を」

「その一つの世界です。ですが決してネットワークのない世界だけが存在するわけではありません。」

他にも広大なネットワークの存在する世界、ましてやAIDAの実体化を可能とする世界があるのも道理ではありませんか？」

「っ!？」

それは笑いごとではない。ハセヲは言葉を失う。

実体化したAIDAなど歩く麻薬と言っても過言ではないだろう。

下手したら——世界が滅びかねない。

「事情はわかっていただきましたか？」

「ま、まあな……」

大体しかわからないが。

「一刻も争う事態なのです。ですのであなたを、”黄昏の使者”として読んだのです」

「黄昏の……」

黄昏。死へと誘う夕暮れ。そして、黄昏時にやってきた使者か。勇者なんて呼称よりかずつと馴染む。割と悪くないように思えた。

「どうか……あの世界をどうかお守りいただけないでしょうか？」
「……分かった」

とんだ後始末だ。迷惑極まりないが、こうなったらやるしかないだろう。

AIDA、テメエがまだ生きているといなら今度こそけりをつけて、この連鎖する悪夢を解き放ってやる……！

台座に刻まれた三爪痕が怪しく光る。
サイン

アチラとコチラを繋ぐ境界線。

ハセヲは入口に手をかける。だがその時、

「ひとつ言うべきことがあります。AIDAを駆除するまで、ここには戻ってこれないということを十分に覚えておいてください」

「おう、わかっ……え!？」

手を——かけてしまった。

「ちょっ、待て!おい!？」

「モルガナの小さき子らに、薄明の幸あれ……」

こうしてハセヲはこの世界から消えるとともに、あることを悟るのである。

あれは絶対狙ってやったと。

第1話 狙ってやった（後書き）

気に食わなくて書きなおしていました。
多少はよくなってるといいなあと思います。

第2話 白き英雄、再誕（前書き）

とりあえず下書き分は全て消費。

あとは地道に進めていくしかないですね。

修正前と大幅に展開が変わっていますが、
そのあたりはご了承ください。

第2話 白き英雄、再誕

「ここは……どこだ？ 市街地？」

にしては人気がなさすぎるし、どの建物、ビルも廃墟にしか見えな
い。

「……まさかもう滅びた、なんてことはないよな？」

洒落にならないぞ。

とりあえずビルに上り、街があるか確認しようとした時、異変に気がついた。

「制服姿じゃねえか……」

ハセヲのプレイヤーである亮が通っている学校の制服と全く同じだった。

もしかして亮自身がこっちに飛んできているのか。

搜索届とか出てるんじゃないかと、少々どころかなり焦ったが近くの窓を見つけることによって、
なんとか冷静さを取り戻した。

「体はPCが元になっているのか」

窓に映っていたのは亮ではなくハセヲ。

ただ赤いペイントはなく、髪と瞳を除けば普通の高校生と大差ない。
亮は今も自室、閉鎖空間と同じかそれに似た状態なのだろうととりあえずは結論づけた。

もし本当にそうであるなら、時間の心配は必要ない。

「しかし、どう戦うんだこれ」

あるのは首に下げられた白と赤の、ギアの形をしたアクセサリーのみ。

他の手持ちは一切なかった。

どうしたものかと思いつつ、建物に入ろうとした時——悲鳴が聞こえた。

「何だ!？」

とつさに振り返ると視線の先には女が佇んでいた。

黒い服に鋼の鎧を見ると戦士のようにも見えるが、手にしているのは杖。

そしてその杖には憎き黒いバブルが……。

「A I D A ! ?」

これほど運が悪いと思ったことはあっただろうか。
戦闘できるかどうかさえ危ういと言っのに。

「私は、強い……!」

「やばっ!？」

いきなり光弾が飛んできたが、横っ跳びで何とかかわす。

「強い強い強い強い強い……!」

すっかりご乱心の女。彼女から繰り出される攻撃はまさに嵐そのもの。

あの様子だと魔法使いと言つよりは狂戦士のほうが的を射てる。

「くっ！」

逃げるだけでは勝ち目はないだろう。こうなったら地の利を生かすしかない。

広い空間では光弾の哀れな餌食となる。

ならば狭いビルの中で不意を突くほかないだろう。

現在進行形で戦闘能力が皆無なハセヲにできることはもはやこれしかない。

「アハハハハハ！」

鳴り止まぬ轟音。降り注ぐ光の雨。そして絶えぬ凶器の笑いがハセヲを追いこんでいく。

「いつぞやのボルドーを思い出すな……」

だが彼女のほうがもっとタチが悪い。この恐怖はまだまだ続きそうだ。

しかしその考えとは裏腹に、ハセヲにとって致命的な一撃が唯一の逃げ場である階段を貫いた。

「なっ！？」

無惨に崩れ落ちる階段に、呆然と立ち尽くすハセヲ。

「もう逃げられないわ。私は強くなった！あんなみじめな思いをしなくていい。

私はあいつらよりもずっと強い！私は選ばれたのよ！アハハハ……

！
」

力に執着する狂気が黒い泡と呼応してどんどん強くなっていく。
浸食が進み、やがて大きな化け物になった。
微生物をかたどった姿には大変見覚えがある。

「万事休す、か……」

だが、

「時空管理局の者です！」

化け物の背後から別の声が聞こえた。10代後半くらいの少女くらいだろうか。

ローラーブーツにガントレットのようなものを身に付けた青髪の少女。

時空管理局。警察のようなものとイメージするが、彼女がAID
Aに敵う可能性は限りなく、低い。

「邪魔をするなア！」

「あぶねえ！」

「きゃあっ！？」

一瞬の出来事だ。

化け物からはじけた黒い泡が少女を薙ぎ払った。
ハセヲもつい、飛び掛かろうとするも結果はすでに見えている。

「ぐっ！？」

あっけなく地面に這いつくばるハセヲと壁に叩きつけられた少女。

少女はかろうじて意識があるものの、致命的なダメージを負った。勝機はない。ただ待っているのは圧倒的な敗北と死。このままでは俺も、あの少女も、死ぬ。

「くそっ！なんでこんな肝心な時に！」

少女にとどめを刺さんとする化け物。

明確に示された死に、ハセヲは無力感に苛まれようとした時、内なる声を聞いた。

——来イ。

ハセヲを心身まで畏怖させる声。だが本来は彼が持ちえた感情。意志。

——来イヨ。

体に宿るのは、碑文。

——オレハ、

この悪夢を抜く大いなる力だ。

『ココニイル!』

ハセヲは白い光を纏い、そして、

☐ スケエエエエエエエエエエエエイス!! ☐

獣のごとき咆哮とともに、内側からナニカが爆ぜた。

「あ……」

絶望に染められた女の声。本能で悟ったのか、それともAIDAが怯えているのか。

赤いペイントが施され、白い鎧を身にまとった少年。その赤い瞳に宿るのは、必ず倒すという強い意志。

白い閃光の中から、AIDAに死を与えんとするかつて世界を救った白き英雄が――再誕した。

「待たせたな」

1歩。彼女も1歩下がる。

「もうこれ以上」

また1歩。だが彼女には逃げ場がない。

「ヒイヒイヒイ!？」

壁に張り付いた彼女は奇声を上げながら黒に染まった光弾を放つ。だがもう遅い。

「好きにはさせねえ!」

光弾はもう彼を、少女も脅かさない。
彼の手に握られた白銀の大鎌『憑神鎌^{スケイス}』が、

光弾を、彼女を、そしてAIDAを、

無慈悲に断ち切った。

——死ヲ刻ム影！

初日の悪夢はようやく終わりを告げたのだった。

第2話 白き英雄、再誕（後書き）

ひと段落……ですかね。

ここからは面倒な時空管理局が絡んできます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5148q/>

.hack//Cross 黄昏の使者と不屈のエース

2011年10月8日16時53分発行